

NEO

The Magazine

[ネオ]

For Card-Life

5

2005 May

[ジャマイカ]
カリブに浮かぶ

永遠の ファンキー・ヴェイラ

The World Sanctuary
—世界美宿紀行—



Hello! Japan —街を、歩けば—

東京都・上野

とことん、お山散歩

NEO'S SPECIAL

エコロジー建築で見る

「愛・地球博」

EXPO 2005 AICHI JAPAN

目吉屋の京和傘

Vol.2

伝統ありて、新しきモノあり。

京
M O N O
語
り

Photographs by Kazuo Hoshi
Text by Mihiko Shimada



日本で唯一、両子家から
製作を許された和傘とは……

人形守の名で知られる、京都市上京区の宝蔵寺。その門前にある目吉屋。創業百十余年を数える老舗だ。滋賀県出身の初代当主が、江戸時代後期に五条本覺寺近くに店を構え、2代目になって茶道家西三子家に近い閑静な今の場所に移ったという。5代目目吉屋当主、西郷耕太郎氏は語る。

「目吉屋の和傘の大きな特色は、表、裏、手茶師用達の5尺(約150cm)にもなる、野点傘を日本で独自の作り方をしている点です」

手刷りや開いた茶室の作法では、一般茶室においては、一雨、傘の心を持つて



屋の大傘なのだ。

「日本文化の他ひびの世界を追求した、先々代の茶匠の考えをベースに、目吉屋の3代目が、形、色、素材など、研究を重ね、余計な装飾を削しながら、最高級の材料を使い、簡素なけれど強とした気品漂う上質な野点傘を完成させたんです。お茶席に一枚の華を添える存在として今の形が確立されたと聞いています」

また目吉屋に所蔵されていた、過去の資料から驚くべき事実が発見される。それは1973年のアサヒグラフに掲載されている目吉屋の野点傘。

「英国の女王エリザベス2世が、英国元首として初めて来日された折に、京都の桂離宮で両子家茶匠夫妻のお点前で野点を楽しまれたんです。これはうちの傘だと、驚いた記憶があります。また、同じく英国のダイアナ王妃が来日された際にも二条城にて、歓迎の野点が開かれました。国賓をお迎えしておもてなしするこれらの席にも、目吉屋の野点傘はたびたび使われ、世界の要人に日本文化を紹介する一助になっているんです」

お茶を点て、お客様をもてなすが、この茶室の精神そのままに、屋外で季節の風景や自然を感じながら茶の湯を楽しむのが野点。その節で、使用されるのが日吉

京和傘

和傘は、中国からその原型が伝来したといわれている。文献上の記録としては、鎌倉時代の絵巻物「春日権現験記絵」には、貴族が傘をさしている図が描かれており、雨具として使われ出したのは、江戸時代、天明年間(1781

~1789)以降のことだそう。江戸後期以降には、生活必需品として広く普及し、最盛期は、昭和24年頃。ところが昭和26年頃から、戦後の生活様式の変化に伴って、市場を拡大してきた洋傘にその地位を奪われ、需要は減少の一途を辿った。京都の和傘製造業者は、高齢化、後継者不足が進むなか、日吉屋は現在である。



西堀 耕太郎
1974年、和歌山県生まれ。高校卒業後、カナダに留学。帰国後、結婚してしばらくののち、日吉屋を継ぎ、現在は5代目当主として活躍。先日もトロントに和傘を持参、大絶賛を受けた。日本の和傘のよきをもっと海外の人にも知ってもらいたいと普及活動を展開中。

●Koutaro Nishibori●

京都市上京区寺之内通壱川東入ル百々町546
☎075-441-6644
http://www.wagasa.com



●骨を組む

使用する竹は九州から取り寄せる孟宗竹で、硬く節の通った上物。竹一本を50に割り、竹の丸みを生かして骨にする。別の竹が混じるのはもちろん、並べる順番を間違えても段差ができてしまうので、一本たりとも入れ替えはきかない。美しい幾何学模様はここから生まれる。

●骨に和紙を張る

使用する和紙は、日本三大和紙の生産地、岐阜の手漉き美濃和紙で最高級品。堅牢性と独特の風合いの両方を求められる。天候により竹や和紙の状態は変化する。状況に応じ、和紙に含まれる水分の量や、張り具合を微妙に調整。多分、職人の勘によるといえる。



すべてが手作業のために、手にピタリと合う道具を何十種類も考案して使い分ける。はさみのような道具は、和紙を張り終えた後、略整に折り目をつけ、折り畳んだときの、行儀をよくするための道具である。



「一見似ているように見えますが構造が全然違います。洋傘は針金の張力で押し出して張り、閉じるときは生地を骨の外に巻きこむのに対し、和傘は骨と骨の間に生地を畳み込み、骨が自然に見える。また和傘は竹と和紙といった自然素材。竹には節があり、和紙には漉きむらがある。そのうえ全部、手作業ですから、自然と職人の個性が出るんですね。洋傘とは違う魅力を楽しんでほしいものです」

「偶然にも、和傘とめぐり合うことになりました」
現在は、3代目の祖母が健在なこともあり、その祖母のもとで修行している毎日だ。昔あった袖袂を引くといった工程も、今は、なくなったりと、時代によって作業も変わるのだが、逆に昔のよさを生かすために、そうした工程を復活させようと考えたりもしているとのことだ。
日吉屋の和傘は、お家芸である大型の野点用だけではない。日常で使われる、110cm大の、番傘や蛇の目傘もある。生色り色の番傘は、主に男性用として家紋や屋号を入れて使われ、上から見た模様か蛇の目に似ていることから名づけられた蛇の目傘は、今では色柄にかかわらず、女性が持つ細身で色鮮やかな和傘の総称となっている。昨今のキモノ・ブームの中、蛇の目傘の問い合わせは、年々増えているという。
和傘に惚れ込み、日々、精進を繰り返す西堀氏が、カジュアル洋傘と比べて和傘にしかないこだわりや味わいを熱く語ってくれた。

●仕上げる

80枚以上の紙をすべて張り終えたと、漆を塗って強化と艶出しをする。骨の上だけに紅の漆を置き、全体に油を引く。その後は、自宅前の宝鏡寺の庭で乾燥させるのだ。職人の技というよりも、雲に近い。



5代目当主が、和傘作りに携わることになった理由

昔は、和傘は下駄と同じく、どこでも作られていて、また販売する店があった。ところが現在は全国的に見ても、十数軒しか残っていないそうだ。表現を変えると完全に斜陽産業である。そんな中で、なぜ西堀氏は、家業を継ごうと思ったのだろうか。
「僕の出身は和歌山県ですが、親戚が移民している関係で、高校を卒業してからカナダに留学していたんです。帰国後は、市役所に勤務していたんですが、彼女の実家がこの日吉屋だったというわけです。のちに彼女は妻になるんですが、京都の彼女の実家に遊びに行ったら、たまたま番傘を間近で見で、すごく驚いたと同時に、シンプルさに感動を覚えたんですね。跡継ぎがいなかったんで、廃業も考えていたらしいんですけど、あまりにももったいないということと、僕が公務員を辞めて、日吉屋を継ぐことにしたんです。先の「アサヒグラフ」の写真を発見したのも、大きなキッカケでした」
さらに、西堀氏は、日本人として内面から湧き上がってくるものを同時に感じたいという。
「カナダに住んでいたときも、いかに自分が日本のことを知らないかと痛感したんです。歌舞伎がどんなだと聞かれても答えられない。そんな背景もあって何か、日本人として、日本文化、伝統文化に携わりたいなと思っていたら、後年に

監修・文/鳥田昭彦 京都市中京区生まれ、実家は代々、贈物に家紋を手描きする紋章工芸師。[from KYOTO]と題して京都のよきモノ、コト、ヒトを知ってもらうべく、日本に世界に情報発信中。